

文学部通信

Newsletter, Faculty of Letters, Kumamoto University

目次

文学部本来の姿の完全な回復へ	1
2023年度新任教員の紹介	2
文学部附属国際マンガ学教育研究センター	2
コロナ禍を越えて7期生を迎えたGLC	2
文学部～この1年～	3～6
総合人間学科／歴史学科	
文学科／コミュニケーション情報学科	
2023年度の教務委員会について	7
2023年度の学生支援委員会の活動について	7
2023年度オープンキャンパス報告	7
留学体験記	7
インターンシップに参加して	7
漱石・八雲教育研究センター活動報告	8
永青文庫研究センター活動報告	8
2023年度熊本大学文学会活動報告	8

文学部本来の姿の完全な回復へ

文学部長 伊藤 正彦

水元豊文先生に替り、2023年4月から学部長を務めている伊藤正彦と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私たち熊本大学文学部の特色は、学部内の低学年次から各学問分野の基礎・技法を学習し、学生が確かな専門性を身につけることにあります。これは、旧帝国大学クラスの文学部、大規模な私立大学の文学部には希薄であり、熊本大学文学部が誇るべきものと自負しています。その結果、旧帝国大学クラスの大学院に進学する方を輩出しつづけるとともに、近年では各学問分野に関係する専門職(学芸員や文化行政関係)に就職する方を数多く生み出すようになってきました。“文学部に入っても潰しが効かない”といった声が聞こえていた時代とは明らかに異なる実績が生まれているのです。

確かな専門性の修得を支えているのは、各学科もとのコース・履修モデルにおける演習・実習等のきめ細やかな少人数教育にほかなりません。コース・履修モデルの研究室には授業以外にもさまざまな行事があり、教員と学生、先輩と後輩の垣根を越えて学部学生がその運営主体となることによって、人間性を高めることができます。

およそ3年間にわたる「コロナ禍」(2020～2022年)の間、大都市圏の大学がロックダウンを余儀なくされた局面も含めて、熊本大学文学部は感染対策の制限と工夫を凝らしながら、各研究室の機能、コース・履修モデルの少人数教育を止めることなく維持してきました。とはいえ、「コロナ禍」のために教育活動は大きく制約されざるを得ませんでした。2023年4月からは、その制約から解放され、生き生きとした演習・実習の授業、研究室の行事等の本来の姿が回復しています。しかし、それはまだ完全なものではありません。「コロナ禍」のために希薄とならざるを得なかった先輩・後輩の間の継承関係の回復には、まだ時間を要するからです。今後も熊本大学

文学部本来の姿の完全な回復に全力で努めていきます。

2023年4月には、文学部の教育研究の充実のために、新たに3名の先生に着任していただきました。コミュニケーション情報学科の伊藤弘了准教授と池川佳宏准教授、総合人間学科の中武章子准教授です。伊藤・池川両先生には、コミュニケーション情報学科の現代文化資源学コースでそれぞれ主に映画学・マンガ学を担当していただき、文学部附属国際マンガ学教育研究センターの業務も担当していただきます。中武先生には、総合人間学科の心理学を担当していただきます。池川先生と中武先生は実務家教員であり(中武先生は熊本市との人事交流)、池川先生には国際マンガ学教育研究センターの文化庁のマンガアーカイブ事業、中武先生には公認心理士コースの実習や大学院課程の準備等で実務家の経験を活かして着任当初から熱心にご尽力いただいております。

冒頭で、確かな専門性を修得できることが熊本大学文学部の特色である旨を述べましたが、教育研究機関としての信頼を損なってしまう事件を起こしてしまいました。報道等でご存知の方も多いかと思いますが、文学部教員による研究不正です。私たちは、文学部の教育の根幹を揺るがす事態として受け止め、本人に深く反省をうながし、今後断じて同様な過ちが生じないよう厳格に対処いたします。ご心配をおかけした在学生・保護者・卒業生の皆様に深くお詫びするとともに、私たちの信頼回復の努力を見守ってくださいますようお願いいたします



所属(学科・コース／研究センター)	専門分野	氏名
コミュニケーション情報学科現代文化資源学コース	マンガ研究・出版史	池川佳宏
コミュニケーション情報学科現代文化資源学コース	映画研究	伊藤弘了
総合人間学科人間科学コース	臨床心理学	中武章子

2023年度新任教員の紹介

伊藤 弘了 コミュニケーション情報学科現代文化資源学コース

2023年度4月に着任いたしました。研究対象は映画をはじめとするメディア芸術全般です。日本映画(小津安二郎、是枝裕和、濱口竜介、北野武など)を研究の柱に据えつつ、外国映画(ハリウッド、ヨーロッパ、アジアなど)やアニメーション(宮崎駿、新海誠、細田守など)、ドキュメンタリーにも取り組んでいます。近年、ポピュラー・カルチャーをめぐる研究は著しく発展しています。映画に限らず、テレビドラマやミュージックビデオ、YouTube動画、CMなど、わたしたちにとって身近な映像文化(視覚文化、表象文化)を通して、学生たちが楽しみながら知性を育み、「人間」への理解を深められるような教育を提供してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



池川 佳宏 コミュニケーション情報学科現代文化資源学コース

2023年4月に着任いたしました池川佳宏です。編集者と学芸員、そして文化庁のお仕事というキャリアを経て、現代文化資源学コースの科目を担当しています。専門はマンガ出版史と雑誌文化についての研究で、これらのアーカイブやデータベース化などの実践的な取り組みも教えています。これまでメディアの出演はそこそこありましたが、教員としての経験が少ないため試行錯誤の連続で難しさを実感しており、早いところ学生への指導が板につくよう精進してまいります。また文学部附属国際マンガ学教育研究センターの兼務教員としてさまざまな活動をしております。どうぞよろしくお願いいたします。



中武 章子 総合人間学科人間科学コース

2023年4月に総合人間学科に着任いたしました中武章子と申します。総合人間学科では、公認心理師受験資格に対応したカリキュラムを実施しており、その中で主に実習科目を担当します。これまでは、福祉・保健・教育の領域において心理臨床業務に携わってきました。専門職にとって大切なことは、大学等で学んだ理論を実際の現場でどのように活かすかということです。これまでの実務経験を通じて細やかな実務教育を行い、学びと仕事をつなぐ役割を果たしてまいります。公認心理師になるという意志をもつ学生が、将来それぞれの組織でリーダー的な役割を担えるように育てていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



文学部附属国際マンガ学教育研究センター

国際マンガ学教育研究センター兼務教員 池川 佳宏

2022年10月に開設された文学部附属国際マンガ学教育研究センターは、2023年4月より新任の兼務教員が2名増え、今年度はキャンパスミュージアム構想での展示企画と熊本創生推進機構での製品開発という学内機関と連携した活動を展開いたしました。

展示企画は、7月末から五高記念館で開催した「梶原一騎が描いた五高生 一あゝ五高 武夫原頭に草萌えて」展として、熊本ゆかり作家・梶原一騎の原作で旧制五高を描いたマンガ作品の研究展示を行いました。この展示は熊本大学×ニューコ・ワン共同企画として葛屋書店熊本三年坂店に巡回し、梶原一騎のご息をお招きしたトークイベントも好評でした。

製品開発は、兼務教員の私(池川)が考案し熊本大学が

実用新案を取得した「中綴じマンガ雑誌用収納ダンボール」で、形が崩れやすい中綴じマンガ雑誌を効果的に管理・収納できるボックスです。月2回刊の雑誌1年・24冊分の収納で女性でも運搬しやすく、背表紙の書誌情報を可視化でき簡易本棚としても使用できます。熊本県内企業BTconnectと共同開発し、ガムテープ不要で再生紙95%というSDGsに配慮した製品として、同社とライセンス契約を結び販売開始いたしました。引き続きセンターでは多角的な活動を進めて参ります。



▲五高記念館での梶原一騎展

コロナ禍を越えて7期生を迎えたグローバルリーダーコース(GLC)

文学部GLC教務専門委員 新井 英永

文学部グローバルリーダーコース(GLC)は、学生受け入れを開始してから2023年で7年目を迎えることとなりました。2020年以降の新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けてGLC生の活動にもさまざまな制約が生じましたが、昨年度に続き今年度の文学部GLC生もコロナ禍を乗り越えて様々な活動に活発に取り組んでいます。

コロナ禍の下で制限されていた海外留学については、GLC各期の学生たちが、昨年度のリーズ大学(イギリス)やサウスイースト工科大学(アイルランド)に続き、ボルドー・モンテニュー大学(フランス)などへと旅立っています。過去3年間、中止を余儀なくされた海外短期留学プログラムや海外インターンシップも実施され、文学部GLC生も参加しました。

この一年、4年生となった4期生は、卒業後の進路に向け

での活動や卒業論文執筆に真摯に取り組んできました。3年生に進級した5期生や2年生となった6期生は、引き続きGLCでの研修やセミナー、フィールドワークを含めたプログラムへの精力的な参加を通して学びを深めています。2023年4月に入学した7期生10名は、5月27日(土)～28日(日)の2日間、GLC1年生を対象として実施された天草研修に全員参加しました。そして、2024年4月に8期生10名を迎えるための入学前セミナーも順調に進んでいます。今後とも文学部GLC生の活躍にご期待ください。



▲天草研修参加学生の集合写真(於 天草青年の家)

総合人間学科

■哲学

關根 咲樹さん(4年)



哲学とは、答えのない疑問に論理的思考で取り組んでいく思考方法です。ゼミの授業は、論理主義を中心に、ネーゲルやフレイゲといった哲学者の著作を英語あるいはドイツ語原文で読み、担当者が翻訳した疑問点を議論することで進めています。外国語の原文を正確に理解したうえで、哲学的理解をすることの難しさはありますが、議論するなかで哲学の知識と技術が身についていくのを感じます。

月に1回の担当教員の辻先生との面談では、課題研究や卒業論文について、アドバイスを受けています。自分が悩んでいる疑問を話したり、思いつかなかった側面からの意見をいただいたり、丁寧な指導をしていただいています。例年4年生が5月と12月に行っている研究発表会には、哲学研究室以外の人や1、2年生も参加することができ、新たな視点からの質問を受けさらに研究を深めることができました。

哲学は本を読み考えを深めることで行う学問なので、これからも研究室内の対話を大切にしながら取り組んでいきたいと思っています。

■心理学

齊藤 咲良さん(3年)



「人の心を読むことができるの？」心理学を専攻していると言うと、そう言われることがあります。相手の表情やしぐさの変化をよく観察して、相手の持つカードに書かれた内容を予測して的中させるようなテレビ番組が流行った影響もあるのでしょう。私たちが行っている研究はそれらとは違いますが、人の行動の90%を占めていると言われる「無意識」に着目しているという点では似ているかもしれません。

心理学とは「心や行動を科学的に解明しようとする学問」です。心理学履修モデルでは、実験で得られたデータを基に分析を行い、人の感覚や知覚のしくみを数値化して明らかにする認知心理学を学びます。私たちは寺本先生と安村先生をはじめ、研究室の様々な方にご指導、お力添えしていただきながら、関連分野の論文を読んだり、研究を行ったりしています。

また、本履修モデルでは公認心理士資格取得のための講義もあり、認知心理学だけではなく、臨床心理学や教育心理学など、幅広い分野を学ぶことができます。

心理学研究室は頻繁にみんなでご飯に行ったり旅行に行ったり、仲が良いのがいいところです。授業のみならず、研究のデータ解析などの際にも分からないところがあれば、みんなで助け合って解決しています。

■倫理学

野々下 菜桜さん(3年)



倫理学とは、人間の行動の規範となる物事の道徳的な評価、すなわち善と悪について検討する学問です。倫理学履修モデルでは、規範倫理学・応用倫理学・メタ倫理学等の分野について学ぶことができます。

私が所属しているゼミでは、各自が興味を持つテーマに基づき文献を読み、その内容を要約して発表し、全員でディスカッションを行います。各自の興味関心や持つ知識が多岐にわたるため、このディスカッションを通して、自分の考えに対して全く異なる視点からの意見をもらえます。自分の知見を広げ、深められる充実した時間なので、学習のうえで

不可欠な機会だと感じています。

私は現在、「道徳的に善く生きるためには感情とどう向き合えばよいか」という問いを中心に、徳倫理学の分野の学びを深めています。徳倫理学は、「善く生きるにはどうすればよいか」という問いに端を発しており、近年再び議論が活発になっている分野です。まだ卒業論文のテーマを決めるには至っていませんが、徳倫理学を学ぶ中で自分の関心と向き合い、ゼミの活動を通じて得た視点も取り入れながら、今後検討を進めたいと思います。

■社会学

池永 健介さん(3年)



社会学が扱う問題や課題は日常の至るところにあります。そのため、私たちの生活に最も近い学問と言っても過言ではありません。皆さんがよく耳にしているであろう少子化問題、貧困問題、人種差別、LGBTQなどの課題はまさに社会学の専門分野です。

ゼミでの主な活動は、社会学の文献を読んだり、卒業論文のテーマについて発表したり、というものです。どちらも「議論」に重きが置かれており、時間をかけて深く考え、意見を共有することで、思考する力を身につけることができます。文献を読む際、1人で理解できないことがあっても、議論の場で様々な意見をもらうことで、わかるようになります。

ゼミの雰囲気はとても良く、みんな仲が良いです。授業外ではゼミ生同士で食事に行くこともあります。お互いの卒業論文のテーマについて話し合ったり、相談したりもできるので、研究がしやすい環境です。また、多岐に渡る研究分野のおかげで、幅広い知見を研究に取り入れられるのも社会学ゼミの強みだと思います。

■文化人類学

宮元 昭桂さん(4年)



文化人類学とは、文献やフィールドワークを通して世界中の異なる民族の文化を比較・研究する学問のことです。自文化と照らし合わせることによって、日常の「当たり前」が他文化では存在しないことに気づき、多様性について理解を深めることができます。旅や異文化への興味といった軽い興味からでも始めることができるのが文化人類学の魅力でもあります。私も、実際にイギリスでの留学やタイでのフィールドワークを経験し、様々なカルチャーショックに直面し「当たり前」という概念が崩れる経験を通じて、世界への視野をより広げることができました。

私の所属するゼミでは、課題読書を行い文化人類学の基礎をおさえる「演習」の時間と、各々が興味のあるテーマについて自由に研究・発表する「応用演習」の時間の両方が設けられています。研究テーマは、フードロスやジェンダー、海外の日本人コミュニティなど多岐にわたっています。ゼミにはデュルケム系、モンゴル系、そしてアラブ系の学生も在籍しており、多国籍・多人種・多言語の環境でお互いに積極的に意見を交換し、刺激し合っています。

■地域社会学

浦上 沙樹さん(3年)



地域社会学は、地域が抱える具体的な課題について取り組む学問です。農村環境や過疎、地域コミュニティ、福祉など、地域社会に関わる多様なテーマを扱います。論文を読むだけでな

く、フィールドワークを通して実際に現場の声を聴きます。これは地域社会学の魅力の1つです。

今年の3年生は社会調査実習にて、熊本県阿蘇郡高森町と大分県中津市耶馬溪町での聞き取りを行い、農業や移住についてのお話を伺いました。そこで聞き取りした内容は、いま調査報告書にまとめているところです。ゼミでは、論文などを輪読し、そこから浮かぶ論点について意見を出し合います。このディスカッションを通して、あらゆる視点から物事を考える力や多くの知識を身に付けることができます。

ゼミの雰囲気はとても温かく、3、4年生、院生は皆で遊びに行くくらい仲が良いです。担当教員の牧野先生、吉武先生も優しく、豊富な知識で指導して下さいます。地域社会学ゼミは、楽しく学び、人として成長できるゼミです。

■民俗学

嵐 羽美さん(4年)



民俗学とは、人々が今日まで伝承してきた文化の変遷や起源を探る学問です。現地に赴き、人々の暮らしを見たり話を聞いたりするフィールドワークを主な手法としています。この1年

間、4年生は自分の定めた研究テーマに基づき、各々のフィールドで調査を行いました。ゼミの活動では、研究構想を数回にわたって発表し、先生方からのアドバイスや学生同士の活発な意見交換を通して研究をブラッシュアップしてきました。私は、地元である大分県に伝わる伝統芸能を研究のテーマとして、現在担い手となっている方々を対象に聞き取り調査を行い、集落において芸能がいかにして生まれ継承されてきたのか、担い手の方々の生の声から考察することに取り組んでいます。後期から始まった3年生との合同ゼミでは、学年の垣根を越えて議論を行うことで今まで以上に学びを深めることができたと感じています。残り少ない学生生活ではありますが、個性豊かで意欲あふれるゼミ生とともに刺激し合い、高め合いながら研究に励みたいと思っています。

■地理学

田中 早織さん(3年)



地理学とは土地や場所、地域などに関する「なぜ」を問い、地域を良くするにはどうすればよいか、といった課題に取り組む学問です。研究テーマは様々で、先輩方はフードデザート問題、農産物直売所、災害伝承と地域防災、ネットショッピングと実店舗、在留外国人、地名の認識、町並みイメージの形成、等々の多彩な問題意識に基づいて卒業論文に取り組んでいます。このようにそれぞれの視点を大事にしながら、様々な問題を土地や場所、地域に結びつけて考えていくのが地理学の特徴です。

この1年、私たちは、地理学の担当教員である鹿嶋先生と米島先生、時に優しく時に厳しい指導のもと研究に取り組んでいます。授業ではGIS(地理情報システム)の使い方や地図の作成方法を学んでいます。また夏休みには地理調査実習で京都市を訪問し、グループごとに設定したテーマに沿ってフィールドワークを行い大変貴重な経験をさせていただきました。この先も研究室の先生をはじめ、先輩や同期の仲間たちとともに充実した地理学ライフを送りたいと思っています。

歴史学科

■日本史学

4月、新2年生14名、新入院生4名を迎えて、総勢48名で、2023年度のスタートを切りました。今年度は4年振りに新歓コンパを実施することができ、楽しい一時を過ごしました。しかし同じく4年振りに企画された研究室夏合宿は、直前に複数名のコロナ感染が判明したため、止むなく中止となりました。

9月、3年次開講の「古文書実習」は、前半は学内で天草上島の宮川家文書を、後半は熊本市立博物館で、熊本藩士の戸北家・飯田家文書等の目録作成作業に取り組みました。宮川家文書からは、全国的にも有名な「天草徴用騒動」(西南戦争に際して、官軍が軍夫を徴用しようとし、民衆がこれを拒否したことから始まった騒動)の新出史料が見つかるなど、重要な発見がありました。5日間の実習の中日には、熊本城周辺のフィールドワークを行い、「中打ち上げ」と称したコンパも行われました。昨年、この実習を経験した4年生は、毎日、3時のおやつ時間に、ジュースやアイスを差し入れてくれました。3年生は、10月から、『実習報告書』作成作業に入り、M1の院生諸君が、これを指導してくれています。

11月、卒業論文と修士論文との中間発表会が開かれました。順調な仕上がりに具合を見せてくれた人に混じって、重い課題を突きつけられた人もおり、悲喜こもごもの様相が見られましたが、それぞれ努力を重ねて、晴れやかな顔で卒業式を迎えて欲しいと願います。



▲古文書実習中のフィールドワークでの1コマ

■考古学

2023年度の学生は、2年生8名、3年生6名、4年生7名、大学院修士1年生2名(うち1名は韓国)、大学院博士2年生1名(ラオス)、3年生1名(中国)の総勢25名(うち休学3名)です。学部2年生として8名が加わり、また2019年度以来4年ぶりに大学院修士課程への入学生がいて、フレッシュな陣容となりました。コロナの感染症法上の位置付けが5類に変更されたこともあり、授業をはじめ大学の活動はほぼすべて対面に戻りました。考古学研究室でも、コロナ禍の3年間で途絶えてしまった研究室行事を復活させています。もちろん、夏の発掘調査実習も4年ぶりに合宿で行いました。調査対象は阿蘇市平原古墳群の3号墳。近くの山田地区公民館をお借りして、学生13名と教員の杉井が19日間、寝食を共にしました。合宿での調査実習が初めての学生ばかりだったので、大部屋でのプライバシーのない共同生活は苦痛かもしれないと心配していましたが、三食の準備、洗濯、入浴、夜のミーティングなどといった合宿生活のリズムにもすぐに慣れてくれたように思います(苦痛であっても口に出せなかっただけなのかもしれませんが)。地域の方々とのふれあいもあり、学生の社会性

の向上にも少しは役立っているのではないのでしょうか。ちょうど今、発掘調査報告書を作っていますが、コロナ禍の3年間と比べて、研究室としての一体感が高いような気がしています。やはり、人は人と直に接しないとイケませんね。



▲平原3号墳調査参加者の面々(2023年9月2日)

■アジア史学

令和5(2023)年度のアジア史研究室は、2年生3人、4年生3人、大学院生1人の7人の構成でスタートいたしました。新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけ変更にとともに、パーティションの撤去や研究室内の飲食の許可など、それまでの厳しい規制が次第に緩和されていったのが今年度の最大の変化です。これにより、学生同士の交流の場としての研究室の機能が久方ぶりに回復されました。新2年生が夜遅くまで残って漢文史料の予習に動んでいるのを見るたびに、ようやくここまで来たかと感無量の思いです。

後期が始まった10月からは、上記に加えて中国からの研究生3人が加わりました。いずれも個性豊かな学生たちで、2年生と意見交換をしながら日々の予習に励んでいます。今の日本人は漢文を「国語」の一部として学習するため、これが外国語であるという意識がなかなか育ちません。中国からの研究生とともに漢文を読解することは、そうした思い込みを脱することにつながると思います。今後の2年生の成長に期待いたします。

まだ夏期合宿の行事を復活することはできておりませんが、来年度は必ずやその実施とそれにとともにアジア史研究室の新しい歩みをご報告できると思います。皆さまに見守って頂ければ幸いに存じます。



▲パーティションがなくなった研究室でゼミに臨む2年生と留学生

■西洋史学

今年度は、コロナ禍の終息により、「良く学び、良く遊ぶ」西洋史研究室らしさが戻ってきた1年でした。4月には、チームワーク抜群の新2年生3名を迎え(総勢28名!)、様々なイベントが復活しました。「グローバル・キッチン」では(5月)、黒人奴隷をテーマにした演習(三瓶先生)との関連で、アメリカ南部料理に挑戦しました。ゴールとなる味付けがわからず、手探りの料理作りでしたが、意外(!)に美味しく、全員が一気に打ち解けることができました。その勢いで、8月には天草での夏合宿、10月には

ドイツ料理とビールを堪能する「オクトーバー・フェスト」も実施されました。中川先生の演習では、近世イギリスのジェントリーの手紙から「男らしさ」を読み解いたり、近世ロンドンのユダヤ人について学びました。9月には藤内哲也先生(鹿児島大学)をお迎えし、「近世ヴェネツィア社会とユダヤ人」をテーマに集中講義をしていただきました。今年度は、ユダヤ人を題材に、異文化間の摩擦や交流を学ぶ、充実した機会をもつことができました。また、多くの学生が熊大の垣根を飛び越えて活動しました。九州西洋史学会若手部会(11月)では5名の学生が研究報告を行い、圧倒的なプレゼン力で熊大パワーを発揮してくれました。8月には、院生の藤井太郎君がマサチューセッツ州立大学ボストン校から帰国し、入れ替わりで9月には、3年生の山元郁人君がワルシャワ大学へ旅立ちました。3月には、『西洋史研究室年報 第25号』が刊行される予定です。



▲藤内先生歓迎会の1コマ

■文化史学

2023年度は、大学院生1名と学部生8名が研究室に加わりました。中国からの研究生1名、昨年に引き続きスイスからの交換留学生1名も迎え入れ、学生総数33名です。

アフターコロナを迎え、夏のビアガーデン・パーティーにバーベキュー、秋の芋煮会など研究室の親睦行事が復活しました。そんななか、学生の話し合いで決まった今年の課題研究テーマは「声」。女性解放を訴えるサン＝シモン主義者たちの声、明治の同化政策で奪われたアイヌ民族の声、植民地朝鮮で日本語唱歌に対抗して歌われた朝鮮語唱歌など、各自のテーマで研究し、年度末のレポートにまとめました。

8月の集中講義では、青森中央学院大学の北原かな子先生をお招きし、音楽と地方教育という視角から日本の近代化について思索を深めました。その後、10月に約1ヵ月間開催された五高記念館での企画展「きこえる熊本の《歌》と《声》」と、10月21日に本学を会場に開催された韓国日本近代学会国際学術大会では、実施責任者の先生方のお手伝いとして、現役学生はもちろん卒業生も協力し、大学と地域、日本と韓国をまたぐ学問的交流の場に立ち会う貴重な体験をしました。ようやく可能になった対面のイベントに参加しつつ、文字や書物ではない、声や音楽の威力を強く実感した1年でした。



▲11月中旬、研究室での芋煮会のひとコマ

文学科

■日本語日本文学 篠原 爽馬さん (3年)

日本語や日本文学について語り合いたくても、これまで周りの誰にも話すこともできずに歯痒い思いをした経験はありませんか？ 日本語日本文学研究室は、そんな経験があるあなたにうってつけです。

まだこれといって専門にしたい分野が見つからないあなたにも、日本語日本文学研究室はおすすです。ひとまず入ってみた後でじっくりと自分の興味関心を探究していくことができる環境が整っています。

日本語日本文学研究室は、日本語学・古典文学・近現代文学の3分野に分かれています。学生一人一人の専門分野や研究テーマは違えど、互いが互いの領域について関心を持ち、新たな知識を得ようとする意欲で、日々学んでいます。

日本語日本文学研究室で一緒に学びを深めてみませんか？



▲「日本文学演習Ⅰ」授業風景

■中国語中国文学 竹濱 さちかさん (3年)

中国語中国文学研究室では3名の先生方のご指導のもと、中国の古典文学、近現代文学、現代政治について日々学習を深めています。少人数の研究室で留学生も多数在籍しているので、学部生から大学院生まで幅広い年代や国籍の学生と意見交換し、先生方のサポートを受けて成長することが出来ます。

今年も行われた卒業論文の中間発表会では、中国について様々な視点から取り上げられ、自分が取り組む分野以外の研究にも触れられたため、学生にとってとても良い機会になったと思います。今年はコロナによる規制が廃止され、研究室での交流も通常通り行うことができるようになりました。来年も卒業論文の執筆に向けて知識を深めつつ、貴重な時間を大切に頑張りたいです。



▲卒論発表会の慰労会の準備中

■英語英米文学 都留 駿里さん (3年)

本研究室では3名の先生方のもと、英米文学を中心に自身が興味関心を持つ分野を深く学んでいます。高校までの英語とは異なり、シェイクスピアを始めとした様々な文学作品を本格的に研究することができます。

本年度は遠隔形式の講義が減り、対面形式の講義が増えました。対面形式になったこと

で先生方や学生同士での直接の対話や意見交流が可能となり、以前より深い学習に取り組むことが出来ました。英語英米分野では主に英米の文学作品を読み解き、作品に込められた作者の意図や当時の社会背景を理解していきます。その際、些細なことでも先生方へ助言を求めたり、他学生の意見を聞いたりとできるため、我々学生には良い刺激になっています。英米文学作品に触れて、多面的な価値観を理解していると感じています。



▲グループディスカッション

■独語独文学 上村 レオンさん (3年)

本年度は3年生4名が独語独文学研究室に所属しており、そのうち1名は今年の秋からドイツのザールラント大学に留学しています。3年生は言語学や音楽、文化、文学などに興味を持っています。人数が少ないからこそ皆が仲良く、先生方の手厚いサポートの下で学習できています。パウアー先生、益先生、名誉教授の荻野先生の下でドイツ語はもちろんのこと、「ドイツの歴史と国民性」「小説とは何か」「ドイツ語圏文化論」など多様な授業を通して楽しくドイツ語圏について理解を深めています。ドイツ語の授業ではドイツ語技能検定試験(独検)対策用の単語帳や中級文法の学習によって、それぞれが着々と独検合格への歩みを進めています。少人数ですが、これから全員で独文研究室を盛り上げていきたいです！



▲学生研究室の一風景

■仏語仏文学 野島 八雲さん (2年)

本研究室においては、仏語学や仏文学について専門的に学ぶとともに、その学びを通してフランスという国やそこに生きる人々の歴史や生活、考え方などへの理解を深めています。

コロナ禍も収束する中で、今年度は対面での活動やオープンキャンパスの再開などもあり、実際に交流する機会も少しずつ戻ってきました。

さて本年度は、仏語仏文学履修モデルに来年度進級する2年生や修士の学生も含めると、計8名で勉学に励んでいます。

仏文では2年生のうちから、辞書を用いて単語を調べたり、語法を先生方に教わったりしながら、実際に原語で仏文学作品を

読むことを行なっています。

今後も先生方の御指導を仰ぎつつ研究を進めていければと思っています。



▲仏語仏文学基礎演習の風景

■比較文学 牟田 夏月さん (3年)

比較文学研究室では、国際的で多様なテーマが取り上げられています。西槇偉先生の授業では、留学の経験がある近代日本の様々な人物を通して、比較文学・文化について学びました。井上暁子先生の授業では、世界各地の文学や移民について、具体的な文学作品を読解しながら理解を深めました。課題発表やディスカッションでは、様々な意見に触れ、視野を広げることができました。最近では、短期留学や海外旅行といった課外の学び、新歓・送別会・「お弁当の会」なども平常通りに行われています。研究室の同窓会が充足され、HPで情報発信し、読書会などもしています。幅広い分野を扱う研究室で、自身の興味関心について、多様な視点から深く研究していきたいと思っています。



▲演習の後、晩秋の真昼の光の下で

■国際文化学 山口 麗さん (3年)

多言語文化学コースでは、広い視野や国際的な視点で映画や文学、音楽などに触れ、私たちの“当たり前”を覆すような発見をしながら異文化接触のあり方を学んでいます。2年次に比較文学と国際文化学の授業を受講し、3年次に興味・関心に合わせて研究室を選択します。国際文化学研究室は2021年度新設なので、第一期生のみんなと一緒に楽しく学べる研究室づくりに励んでいます。初めてのオープンキャンパスでは、研究室で多くの高校生と交流してきました。今後もっとメンバーが増えて、より多くの視野や発見が得られる研究室にしていきたいです。ちなみに私は今、化粧が対人コミュニケーションに与える影響について、日本、韓国、アメリカの3カ国を比較しながら研究しています。



▲初めてのオープンキャンパス

コミュニケーション情報学科

■ 全体総括

2023年度4月、授業のほとんどが対面形式となり、キャンパスに多くの学生が戻ってきました。コミュニケーション情報学科はお二人の新任教員をお迎えしてのスタートとなりました。池川佳宏准教授は多くの実務経験をお持ちで、メディア芸術アーカイブや出版史(主に雑誌)を研究されています。伊藤弘了准教授は映画研究(主に小津安二郎)をご専門にされ、映画評論も数々の雑誌等で発表されています。これからの活躍が期待される有能な方々です。

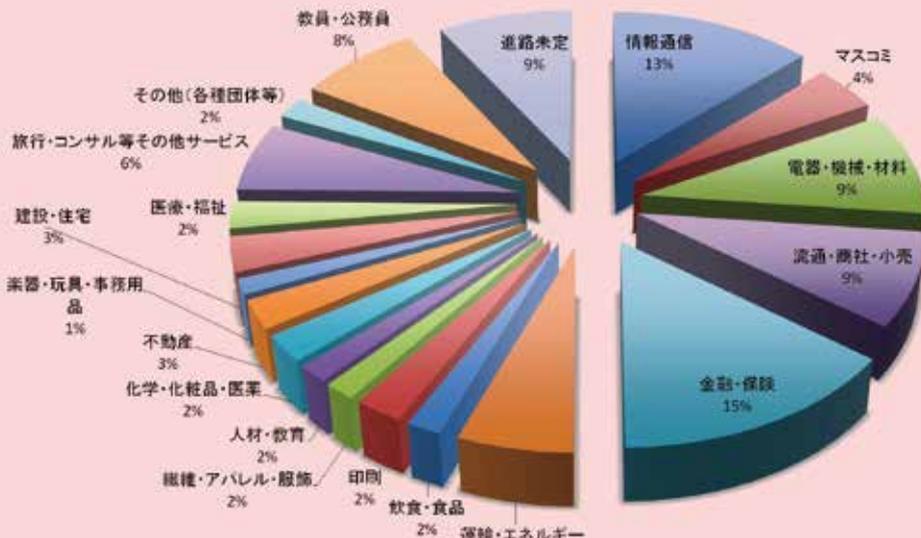
学生生活もコロナ以前に戻りつつあり、7月にはこの間開催できなかった歓迎会を開催しました。1年生だけではなく、学科の学生全員を招待しての開催となり、学年を超えて懇親を深められたと思います。昨年度から交換留学も再開しましたが、今年度もコミュニケーション情報学科から複数の学生が申請しており、イギリスやオーストラリアでの留学を実現するために、英語学習などに取り組んでいます。また、学科で触れた研究を継続したいと考える学生も多いのが最近の傾向で、大学院への進学が確定した学生もいます。

■ 就職状況

今年度卒業予定の35名の就職内定率は91.4%、進学を含めた進路決定率は97.1%となっております(2023年12月末現在)。ここ数年、長引いたコロナ禍やウクライナ侵攻に伴う世界的なインフレやエネルギー価格の高騰など、経済へのマイナス要素が多くなりましたが、2022年度以降の国内の就職状況は概ね堅調に進んでおります。

本学科の卒業生は従来、情報通信系や金融の就職が多数でしたが、今年度は流通・商社・小売が6名と一番大きな割合を占めました。またこれまでなかった繊維・アパレル・服飾関連も増えています。広告を含めたマスコミや公務員も毎年数名が就職しています。また、比較的熊本県内や九州への就職が多い傾向から、TSMCなどの製造業の誘致の影響で、電器・機械・材料関連などへの就職は今後さらに増加する可能性があります。

▼学科開設以来の就職内定先*



■ コミュニケーション情報学コース

「外に向けて活発につながる」というコミュニケーション情報学コースの姿がようやく戻ってきました。本年度になり、学科を超えて新たな「つながり」を築く学生が目立ってきました。

昨年から続けている地元商店街「上乃裏通り」のエリア・ブランディング支援については、活動母体となる商店会の立ち上げに協力し、プロモーションや販売促進、環境演出などにわたるブランディング活動の計画を策定。LIGHTSCAPE CARAVANと名付けられたイベントを開催し、活性化の一翼を担いました。地域課題への取り組みという点では、九州という少し広いフィールドで社会課題を考えるコンテスト『九州ミライ』に参加する学生もいます。

<https://kyushu-milive.com>

また、情報通信やメディア関係への就職を志望する学生が一定数いることもあり、今年度は新たに、電子機器や情報技術に関する業界団体である「電子情報技術産業協会(JEITA)」による調査研究に参加しました。若者のテレビ離れの現状を踏まえ、未来のテレビ端末や番組の在り方について、開発者や研究者、そして学生の間で熱い議論が交わされました。

「若手研究者」として学問志向での交流に積極的な学生もいます。12月に開催された『第3回 Kumadai-Hub 巡回ポスター展』では、コミュニケーションや消費行動と感情や意識の関係などの研究をおこなっている4名の学生が発表をおこないました。

<https://sites.google.com/cs.kumamoto-u.ac.jp/kumadai-hub-jp/>

仕事を始めた社会人としての営みの多くは、他者との協働です。コミュニケーション情報学コースでは、学生時代から自分ひとりではできないことを他人と一緒に作り上げていくことで自身の成長を促す、という姿勢を大切にしています。

■ 現代文化資源学コース

現代文化資源学コースでは、昨年度末に第1期卒業生を送り出し、今年度4月に初めて大学院生1名を迎え入れました。今年度迎

現代文化資源学の実践的な調査研究

星 華音さん(3年)

「現代文化資源学実習」の授業では学生がグループごとに分かれ、『週刊TVガイド』を用いた記事の分析や、人吉球磨での妖怪伝承についての調査を行いました。その中で私は、マンガ雑誌や単行本を18万冊アーカイブしている南熊本の「森野倉庫」での資料整理班に入りました。私が幼少期に読んでいた『ちやお』などのマンガ雑誌や昭和時代のマンガ雑誌もあり、付録や掲載内容などを比較することができ、とても良い体験になりました。

前後期を通した「課題研究」では、担当教員ごとにゼミに分かれ、個人の興味に沿った研究を行っています。私は異世界転生マンガを対象にしたのですが、普段読んでいたマンガから「問い」を立てることにとっても苦労しました。しかし研究を通じて、普段のマンガの読み方に対して深みが出たように感じています。ゼミでは、担当教員をはじめ同ゼミ生から積極的にフィードバックをもらうことができ、昨年設置された国際マンガ学教育研究センターに収蔵されている学術書や資料を活用しながら、多角的な視点から研究を進められていると実感しています。



▲森野倉庫では初めて見るマンガがたくさん

えた学部生は、2年次進級者14名、グローバルリーダーコースの3年次進級者3名と、これまでになく多い人数です。教員の陣容についても、池川佳宏准教授、伊藤弘了准教授の2名が加わり、メディア論の分野の研究・教育がさらに増強されました。

現代文化資源学コースは「新たな文化価値の創造」をキーワードに創設されました。卒業論文のテーマは落語や流鏝馬といった伝統文化から、戦後のマンガ文化に関するもの、また公園のすべり台の色についてのフィールドワーク調査研究まで多岐にわたります。この中から来年度は1名が大学院へ進み研究を深めようとしています。

「現代文化」というのは良くも悪くも間口が広く、個々の学生の関心に即して自由度の高いテーマ設定が可能です。ただ、本当に自由になんでもやってよいと云われると、逆にどうしたらよいかわからなくなってしまふということもしばしば起こります。自分の本当にやりたいことは何だろうとあれこれ悩み回り道する経験は一見すると効率が悪いように思われますが、学問に王道なしと古くから云われるように、迂遠であっても着実な試行錯誤の積み重ねこそが結果的には一番の近道であろうと思います。

※コミュニケーション情報学コースのみの時代の2007年度卒業以降の実績。進路把握の難しい留学生を除いた就職者516名(本学大学院修了3名を含む)を対象。

2023年度の教務委員会について



文学部教務委員会は、正副委員長各1名と各学科選出委員4名とで構成され、担当の職員と連携して教務全般の管理運営を担っています。

学生は大学で学ぶにあたり、履修登録を行い、受講し、試験等による評価を経て単位を修得します。そして進級に伴い進学コースや履修モデルを選択し、専門教育を受け、最終的に卒業論文を執筆して学士となります。在学中に留学する学生も少なくありません。本委員会では、そうした節目ごとの各種申請や、進級と卒業にかかる判定、また休退学・転学部・転学科に伴う身分異動などに関して審議をします。さらに委員長は、文学部代表として大学全体の教務会議にも出席し、全学的な

文学部教務委員会 委員長 多田 光宏

案件や方針を検討するための議論に参画します。

近年の大学改革で、本委員会では、学事暦の柔軟な運用(クォーター制)や履修科目の登録上限設定(CAP制)といった課題についても数年前より継続的に議論を重ねています。また、新年度生から全学的に必修外国語科目数が増えるのに伴い、今年度は履修規定等の一部改定についても検討を行いました。

新型コロナウイルス感染症の世界的流行が収束に向かい、ようやく従来の学生生活が戻りつつあります。大学を取り巻く環境は流動的で、課題は尽きませんが、学生の皆さんが落ち着いて学業に専念し、充実した学びの時間を過ごせるよう、教務委員会一同、これからも努力を続けていく所存です。

2023年度の学生支援委員会の活動について



文学部学生支援委員会は、学生生活全般の支援を目的として、各学科から委員4名と委員長により形成されています。

本年度の各学科の学生支援委員の活動は、4月の新入生ガイダンスでの大学生活に関する情報提供とアドバイスで始まりました。初めての大学生活や各学科にスムーズに馴染めるように、各学科で歓迎会等も実施しました。今年度の新入生は高校時に新型コロナの影響を強く受けた学年のため、より一層学生同士や教員とのつながりを持てるよう意識して諸活動を行っています。

当委員会には、本学の就職支援課と連携して学生の就職や進路を

文学部学生支援委員会 委員長 トビアス・バウアー

援する役割もあります。文学部の就職率は一昨年より増加傾向にありますが、さらに好転できるよう、学生に1・2年生の早い時期から必要な情報を提供することを目的に、民間企業の協力を得て「IDEATION FACTORY」という課題解決のための発想力養成プログラムを実施しています。さらに、文学部生のニーズに特化した「キャリアガイダンス」を、本年度は初めて1・2年生を対象に実施しました。参加学生にはとても好評だったようです。

学生時代は、社会との関わりを意識しながら生活や学習の中で試行錯誤し、様々な知恵を身につけていく時期です。学生の自主性を尊重しながら、充実した人生への助走を応援するのが当委員会の役割だと考えています。

2023年度オープンキャンパス報告

2023年8月5日(土)に、オープンキャンパスを実施しました。過去3年間はホームページやZOOMを用いた遠隔形式での開催でしたが、今年度は久しぶりの来場形式での開催ということもあり、参加者の期待も高く、当日は文学部棟に約千人もの人々が集まりました。これまでも人気の高かった模擬授業や研究室訪問に加えて、今年度から新たなイベントとして、高校生から寄せられた受験対策や大学生活に関する質問に学生が答える「なんでも相談会」を開催しました。廊下に長い行列のできた学科や研究室も多くありました。また、保護者の方々からも奨学金、就職状況などについて多数の質問をいただきました。参加

広報・情報化推進委員会 委員長 平野 順也

された方々が文学部に高い関心を持たれていることが伺えました。猛暑の中での開催となりましたが、新型コロナウイルスだけではなく熱中症対策も徹底して行いました。3年ぶりのオープンキャンパスを無事に終えることができたのも、当日ご協力頂いた先生方、炎天下にも拘らず丁寧に参加者の誘導してくれた学生の皆さん、そして最後まで設営等に尽力いただいた職員の方々のおかげです。来年度も文学部の魅力をお伝えできるよう、充実したオープンキャンパスを実施したいと考えています。

留学体験記

■コミュニケーション情報学科 池田 昂汰さん(3年)

私は、アイルランドのウォーターフォードにあるサウスイースト工科大学で9か月間の留学を経験しました。初めは語学力や生活に不安を感じていましたが、結果として充実した経験を得ることができました。

留学中、最も苦労したのは英語でのコミュニケーションでした。英語が得意ではなく、自分の思いを正確に伝えることが難しく、焦りを感じることがありました。他の優れた留学生を見て挫折しかけたこともありましたが、最終的には諦めずに努力し、自分の考えを十分に伝えられるようになりました。また、留学生活では日本とは異なる文化や習慣に戸惑うこともありましたが、出会いに恵まれ、楽しい時間を過ごすことができました。

留学で得た最大の収穫は、様々な国の人々と文化に触れ、柔軟に思考する能力を身につけたことです。留学期間中、アイルランド人だけでなく他のヨーロッパの留学生との交流を通じて、異なる国々の文化や習慣に触れ、自分の視野が広がりました。自分の常識は一步日本の外に出ると常識ではなくなるということを知り、自らの世界観が一変される感覚を味わいました。



インターンシップに参加して

■歴史学科 脇野 鈴花さん(4年)

私は3年次の7月より人材紹介会社での長期インターンに参加しています。コロナ禍で2年間ほとんど大学に通えず、就職活動への漠然とした不安を抱えていた5月、九州大学の知り合いからの紹介で参加したイベントで「社会で活躍するリーダーになる」というこの会社のビジョンに共感し、入会を決意しました。

業務内容は主に2つで、それぞれ「友達の就活サポート」と「企業の新卒採用のお手伝い」です。友達の就職活動を内定獲得に至るまでサポートして、「ありがとう」という一言を頂けることに大きなやりがいを感じました。またある企業の人事担当の方々やイベントを企画したり、定期的に会議をしたりするなど、得がたい経験をするチャンスも頂きました。さらに今年からは学生代表として後輩の就職活動のサポートを行っています。すでに何人かの後輩が内定を得るなど、大きな充実感を覚えています。

このインターン経験によって、自分の人生がこれまでとは全く違う方向に向かっていると日々感じています。社会人生活がとても楽しみになりました。自分を変えたい、と思っている人は、ぜひこうした環境に飛び込んでみてください。



▲1月回、社内イベント中の様子

漱石・八雲教育研究センター活動報告

漱石・八雲教育研究センター長 新井 英永

漱石・八雲教育研究センターは、2017年12月に設置された文学部附属センターです。熊本大学の前身である第五高等学校ゆかりの夏目漱石と小泉八雲について、本学教員がセンター兼務教員として共同研究を行ない、文化行政機関等との連携により地域文化振興に貢献することを主な目的としています。

その地域貢献活動の一環として、2022年4月に出版した『アイラヴ漱石先生：漱石探求ガイドブック』（漱石・八雲教育研究センター／NPO 法人くまもと漱石文化振興会共編、集広舎）が、2023年3月に第44回熊日出版文化賞を受賞しました。また、2020年に創刊した欧文雑誌 *Soseki and Hearn Studies* のVol.4を2023年春に刊行しました。

本年度の活動としては、7月1日(土)に日本比較文学会九州支部との共催でシンポジウム「漱石とハーン：翻訳の視点から」を開催しました。7月26日(木)にデミアン・コール駐日アイルランド大使らが熊本大学を訪問した際には、熊本アイルランド協会と連携し、五高記念館におけるコール大使の講演会を実施しました。学祭期間中の11月4日(土)には、附属図書館ラーニングcommonsにて、セミナー「夏目漱石・小泉八雲について知ろう!!」を開催しました。このセミナーは、漱石・八雲教育研究センターが肥後銀行地域振興部と連携して開催したもので、本センターの3人の文学部教員が講演しました。



▲肥後銀行との連携セミナーにおけるセンター講師陣

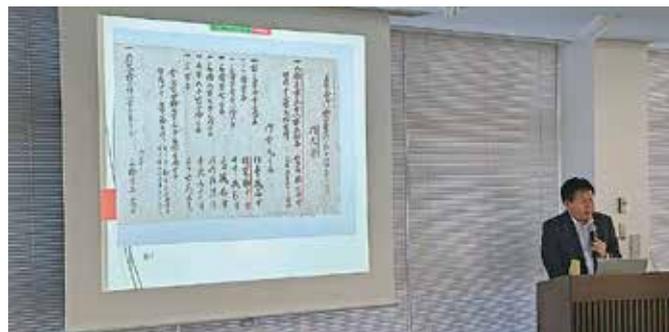
永青文庫研究センター活動報告

永青文庫研究センター専任准教授 今村 直樹

3年間のコロナ禍が明けた本年度、当センターは以下の活動を精力的に行った。

まず、研究活動では、稲葉継陽センター長による論文集『近世領国社会形成史論』（吉川弘文館、2024年2月）が刊行された。研究紀要『永青文庫研究』第7号も2024年3月刊行予定である。基礎研究では、松井家文書の総目録作成事業に加えて松本寿三郎氏収集文書のそれに着手し、大きな進展をみた。本年度からは、科学研究費補助金「永青文庫資料と『くずし字AI-OCR』の活用による17世紀社会論・公儀権力形成史の再構築」（基盤研究(C)）、同「永青文庫細川家文書『口書』の総合的解析による日本近世民衆史の研究」（基盤研究(B)）による共同研究も新たに始まった。

社会貢献活動では、稲葉センター長と後藤典子研究員が担当した附属図書館貴重資料展「甦る歴史資料群－修復された絵図・古文書展－」および第17回永青文庫セミナーが開催され、多くの参加者を集めた。また、松本寿三郎氏収集文書が出展された玉名市立歴史博物館こころピア企画展「国指定史跡熊本藩高瀬米蔵跡展」（2023年10月21日～2024年1月8日）、センターが特別協力を行った熊本県立美術館細川コレクション特別展「土方歳三資料館×肥後熊本藩」（2024年1月10日～3月24日）も開催された。松井家文書からの新史料発見に基づくプレスリリースも活発に行われた。



▲稲葉センター長による講演

2023年度 熊本大学文学会活動報告



2023年度 文学会常任理事 小畑 弘己

文学会は、文学部の教育と研究を支える、学生と教員による互助組織です。本年度は主に、以下の事業を計画・実施しました。

1. 文学部の教育・研究環境整備のための支援

文学部図書室環境整備などに500,000円を支援しました。

2. 講演会・学会等への支援

熊本を主会場とする学会への支援として、現時点(2023年12月13日)で、「西日本社会学会」、「日本比較文学会学会」、「韓国日本近代学会」の3件に補助を実施。

3. 就職活動に対する支援

①就職情報誌提供事業

就職情報誌を各履修モデルの希望に応じて提供しました。

②就活用写真撮影補助

履歴書用の写真撮影費を半額補助。現時点までの申請はありません。

4. 研修旅行補助

授業のための調査旅行や実習旅行、各研究室で課外活動の合宿・研修旅行に対する補助(参加学生一人当たり2000円)を実施。現時点で4件に58,000円の補助を実施。

5. 進級記念品

4年生に進級した学生会員115人に図書券(総額460,000円)を支援しました。

6. 新入生歓迎行事・卒業式関連行事に対する支援

新入生歓迎行事に122,500円を支援しました。

7. 図書等整備費

本年度は文学科と情報コミュニケーション情報学科に対して、それぞれ150,000円の補助を実施します。

8. 留学のための語学試験補助

試験料の一部を補助しています。現時点での実績は1名に7,850円を補助しました。

9. 学生の学術交流に対する支援

学生が中心となって企画・運営する他大学との学術交流への支援を実施しています。現時点での実績はありません。

10. 学生用コピー機の維持管理

現時点で、支援額は70,365円となっています。

11. 『文学部通信』に対する補助

『文学部通信』の印刷・発行費用と保護者への郵送料を負担しています。

12. その他(激甚災害被災者への補助)

本年度発生した地震や大雨などの激甚災害に指定された4件の災害について、その被災者の被災状況を調査し、申請者には災害見舞金を支給予定です。

上記の事業は、会員(学生と教員)の会費によってまかなわれ、文学部の教育・研究活動に広く還元されるものです。多くの方のご加入を希望いたします。今後とも文学会への皆さまのご理解とご協力をお願い申し上げます。

文学部通信 第23号

2024年3月1日

発行：熊本大学文学部／熊本大学文学会
編集：熊本大学文学部 広報・情報化推進委員会
平野順也、小林晃、及川高、松岡浩史、池川佳宏
ウェブサイト <https://www.let.kumamoto-u.ac.jp>

